



装光妖精

SOUKOUYUSEI SOLLITE

ソルライト

—装光勇者の伝説—

Teitai Drive
停滞ドライブ

体験版目次

あらすじ

目次・あらすじ	3	かつて、光の力を纏って戦う変身ヒロ
キャラ紹介	4	イン・装光妖精として邪悪なる生物群・
キャラ立ち絵	5	ライフマテリアから世界を救った少女
プロローグ	8	たち。
沈む太陽	15	彼女たちは今、自らの取り戻した平和
落ちる月	18	を謳歌していた。
穢される星	20	しかしある時、彼女たちの前に魔方阵

3

※プロローグ以外はエロシーンの一部
を抜粋しています。

う。

その異世界の住人は少女たちを勇者

として召喚したと言った。

そして、この世界の平和を脅かす邪悪

な魔術師と戦ってほしいとも……。

キャラ紹介

他の2人よりも一回り幼く、小動物的

日之宮あさひ（装光妖精ソルライト）

な愛らしさがある。

かつてあさひに救われたことがあり、

主人公。

あさひに憧れている。

明るいい性格でとても正義感が強い。

装光妖精に変身している時は光の弓

装光妖精に変身している時はガント

矢を用いて主に回復・支援を行う。

レットや金属ブーツを用いた肉弾戦を

得意とする。

望月優（装光妖精ルクスルナ）

ポーカーフェイスが特徴のあさひの

親友。

あさひのことが大好き。

装光妖精に変身している時は、光のエ

ネルギー剣を駆使して戦う。

星野ななせ（装光妖精スターブライト）







プロローグ

「平和だね〜」

とショートヘアの少女、あさひが緩んだ表情で言った。

暗雲立ち込める空の上、グロテ

「ですね」

スクな肉壁の十字架に、希望の少

とポーカーフェイスでポニーテ

女たちは礫にされていた。

ールの少女・優が返す。

少女たちの心身は度重なる責め

続けて、

苦によって摩耗しボロボロになり、

「そうだねー」

その姿は見るものに絶望を与えた。

と、小学校高学年くらい以外の他の

その絶望を糧に、邪悪は少女た

二人よりも一回り幼い少女、なな

ちを破壊せんと、愉悦を感じなが

せが答えた。

ら処刑の杖を起動させる。

緩い表情で緊張感の欠片もない

少女たちの命運は……。

会話を交わす少女たち。

一見すると、ただのだらけた少

女たちははかつて、世界を救ったこ

とある日。

とがあった。

日之宮あさひ、望月優、星野な

光の力を纏って装光妖精という

なせの三人は、暖かな日が差す休

姿になり、ライフマテリアという

日をゆっくと過ごしていた。

敵に立ち向かった。

そして何度も苦戦し、傷つきな

もなく発光する。

がらも勝利したという過去がある。

そして、その光は瞬く間にあた

彼女たちは今、自らが取り戻し

り一面を飲み込んだ。

た平和を謳歌している最中だった。

しかし、そんな平和なひと時も、

力を持つものの定めか、脆く崩れ

閃光の後。

去ろうとしていた。

あさひたちが目を開けた時、彼

女たちは大勢の人々に囲まれてい

た。

「暖かくて、ねむっちゃいそ……

その人々は老若男女ファンタジ

ん？」

ックな服装をしていて、その背後

「どうかしましたか、あさひ？」

に見える風景もあさひたちがいた

「あさひさん？」

場所とはまるで違ったものだった。

あさひが目を凝らすと、目の前

「な、なにに？」

に巨大な魔方陣のようなもの。

「コスプレ会場ですかね？」

まるでこの場に似つかわしくな

「違うような……」

いそれを、はつきりとあさひは見

周囲の状況に戸惑う三人。

た。

すると彼女たちを囲む人々から

魔方陣が、他の2人が気づく間

歓声があがった。

「おおおおおおお！」

「召喚の儀式は成功だ！」

「勇者様が来てくれたぞおお！」

異様なまでの熱気を持って人々は雄叫びにも似た歓喜をあげた。

それに少し気圧されながら、あさひたちは人々の方から聞こえたある単語を呟いて、三人同時に首を傾げた。

「勇者？」

少しして人々の興奮も落ち着いてきた頃。

ファンタジックな住人の代表のような老人から、あさひたちに説明があった。

なんでも、数千年に一度現れる邪悪な魔術師が間もなくやってき

て世界を支配しようとするのだという。

そして、それに対抗するために異界、あさひたちにとっては自分たちの世界で特殊な力を持つ彼女たちを呼び寄せたという話だった。「もちろんお礼はします。お願いします。勇者様の装光の力をお貸しください！」

必死なまでの住人の懇願。

その言葉の中にはあさひたちが聞き慣れて、最も身近でありながら、特別な単語があった。

「装光……」

ぼつりとななせが呟く。それに応えるようにこくりと頷いて住人は言った。

「そうです。あなた方の持つ光の力。それが巨悪に対抗する術なの

です」

住人たちは祈るような視線をあさひたちに向けた。

それはあさひたちの返答への期待と不安から来るものだった。

それに対して、あさひが答えた。

「わかりました。私たちで良ければ。力にならせてください。お礼も大丈夫です」

もとより正義感の強いあさひの答えは決まっていた。

誰かが困っていて、それを解決できる力を持っている。

そんな状況であさひにノーと答える選択肢はなかった。

「……あさひは人が良すぎます。

はあ……付き合いますよ」

優は決して、正義感が強い方ではない。

だが、彼女の行動は大好きなあさひに起因するもの。

口では皮肉めいたことを言いながらも結局は彼女の選択肢もまた、ひとつだった。

「わ、私も頑張る」

ななせも幼いながら、あさひに負けず劣らず超がつくほどのお人好しだった。

つまりは三人とも、初めからイエス以外の選択肢はなかったのだ。

「おお！ ありがとうございませす！」

三者三葉、リアクションの違いはあれど、あさひたちの取った答えはもちろんイエス。

その答えに、二択の不安から解放された住人たちは歓喜する。

あさひたちの快い答えに喜んだ

住人たちによってまた場が騒然としていった。

を見ると、もうそこにあさひたちはいなくなっていた。

するとそんな中、突如巨大な雷鳴が鳴り響く。

それは騒ぐ住人達を戒めるようでもあった。

あさひたちは不穏な空気が支配する外へ飛び出していた。

そして、その雷鳴を聞いて住人達は今までの空気から一変、恐慌状態で次々に言葉を吐いた。

邪悪な気配を察知したなら、その場に留まってなどいられない。

「これは……!」「魔術師だ!」「そんな、早すぎる!」

彼女たちの性分がその体をすぐ
に邪悪の元へと向かわせた。

場の空気は先ほどまでとはまた別の意味で騒然としていった。

あさひたちが見上げた上空に明らか
にそれとわかる、巨大な異形が浮かんでいた。

そこへ、代表者が一喝するよう
に叫んだ。

今までの流れから、それが件の
魔術師と関係するのだろう。

「皆の者、慌てるな! 今こそ勇者様の力を借りる時! お願いします、勇者様……おや?」

ならば、倒さねばならない。

代表者があさひたちのいた場所

り出してかぎす。

三人はそれぞれ、太陽・月・星の形をしたアクセサリーを懐から取

それらはあさひたちの変身アイテムであり、装光の力の象徴だった。

彼女たちは同時に同じ言葉を叫んだ。

「『装光』！」

——『装光』——

このワードを唱えることで、あさひたちは装光妖精という姿に変身する。

あさひは白地に青のカラー、赤のスカートといったオーソドックスなセーラー服をベースにし、腕にはガントレットが足には金属ブーツが装着される。

髪色はオレンジでその胸当てには太陽のマークが刻印されていた。

優は黒の生地とカラー、水色の

スカートのセーラー服で、どこか忍者を思わせる外見となる。

腰にはベルトが巻かれ、そのベルトについた鞘には剣の柄が納められていた。

髪色はそのまま黒色で、胸当てに刻印されたマークは三日月だった。

ななせのベースは他の2人と異なり、紅白の巫女服だった。

武器は弓。髪色は薄黄色。

黒い弓道の胸当てには、大きく星のマークが刻印されていた。

これが、あさひ、優、ななせの

装光妖精としての姿。

それぞれ、ソルライト、ルクス
ルナ、スターブライトだった。

「行こう、ルナ、ブライト！」

「はい」

「うん！」

ソルライトを中心として装光妖
精たちは異形に向き合い、すぐに
立ち向かう意志を決めた。

沈む太陽より

の足はぶるぶると震えてしまう。

「だが我が体は群体。分断された個の力は及ばない」

今ソルライトは体の芯を揺さぶ

「なにを言って……!?!」

る感覚に耐えているために、立っているのがやっとなところだった。

今度は下からボコボコとなにかが生成される。

そんなソルライトの醜態を見て、魔術師は意地悪く笑ったような声で説明した。

そのなにかは巨大な一つ目といった風貌だった。

「その魔物の視線は対象物に強烈

「我が体内では、いくらでも魔物を生成できるのだよ」

な快楽を与える。特に女の身にはな」

「そんな……くひゃああん!?!」
新たな魔物の出現で動揺するソルライトの体を稲妻のような衝撃が駆け巡った。

「かい……らく……ひいいん!」
さきほどの熱が冷め切らないうちに新たな衝撃が重ねられ、ソルライトは嬌声のような悲鳴をあげさせられてしまう。

身悶えするような、むずがゆさを少しオーバーさせたような感覚。

一つ目が快楽を与えんとする視線

意地と闘志で耐え、膝をつきこそしなかったものの、ソルライト

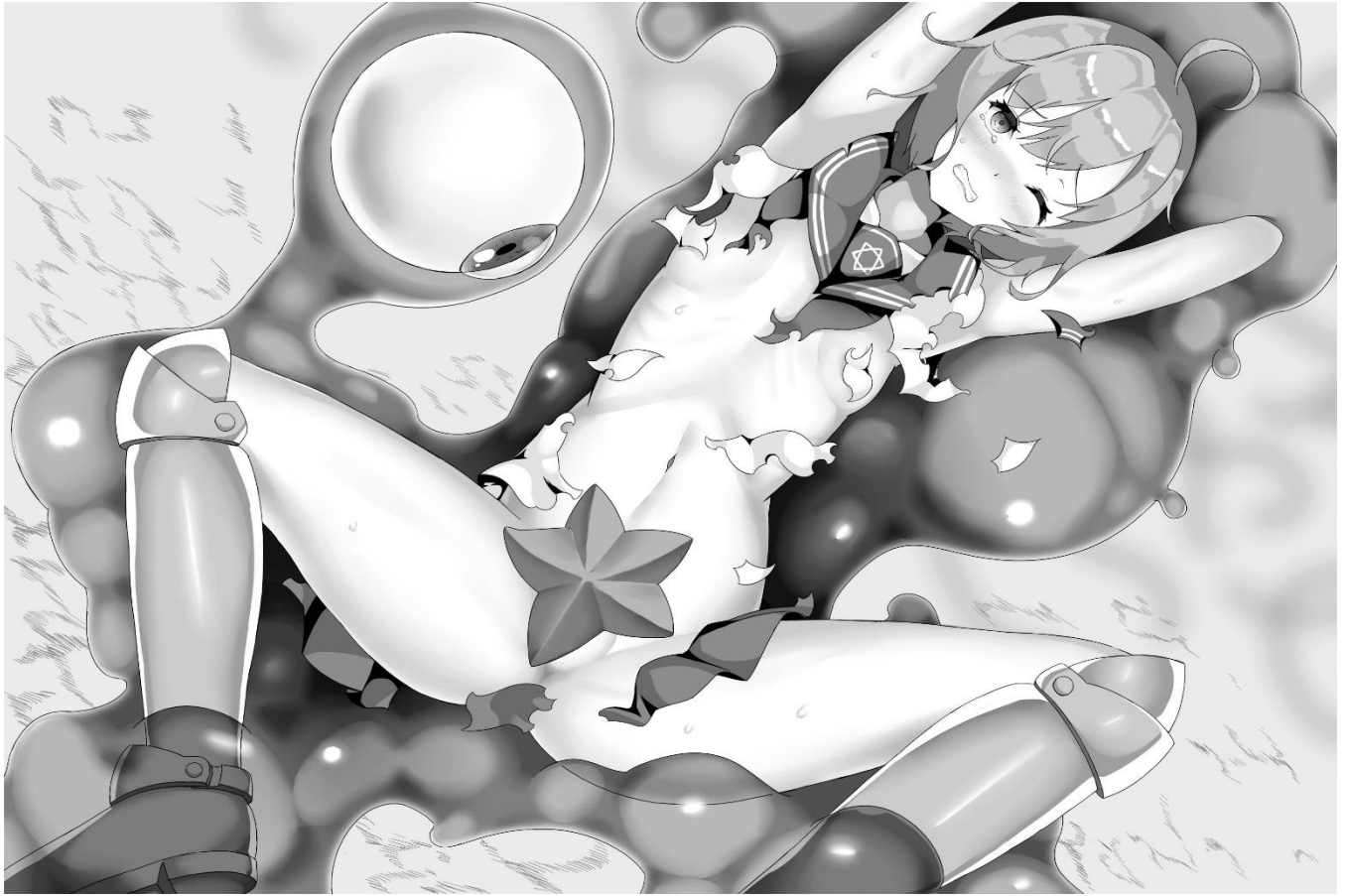
線の間があった。

そして、さらに詳しく言うなら
その視線はパンツ越しではあるも
の、女性の体で最も敏感な部分
の一つを集中して見つめていた。

快樂視線の一点への集中砲火。

その一点の場所に気づいたソル
ライトは慌てて股を閉じようとす
る。

これ以上、快樂を受け続けるわ
けにはいかない。



墮ちる月より

たまらずルクスルナも目を見開いて絶叫する。

「くっ……」

さきほどまでの体の火照りなど上書きし消し飛ばすような地獄。

「勝負ありのようだな。ここからは勇者殿にお楽しみ頂くか」

「お楽しみ？」

熱が、ルクスルナのポーカーフェイスを引き剥がす。

ルクスルナは訝しげに、内心の不安を押し殺して疑問の声だけをあげた。

「熱い、あつい、あついいい！」
ただただ与えられる苦痛にルクスルナは泣き叫んだ。

そんなルクスルナの健気な努力はすぐに押しつぶされることになる。

「そうか、そうか、熱いか。では冷やして差し上げねばな」
「ひっ……きっ!？」

精霊がルクスルナの乳首にまわりつき、異常なまでの高熱を発生させたのだ。

一転、魔術師の言葉を受けて精霊は絶対零度のごとくその温度を下げた。

「ひきゃあああ!」

突然の灼熱から極寒。

このなんの脈絡もない灼熱には、

急激な温度の変化にルクスルナの頭と心はパニックに陥っていた。

「冷たい、なんで、なんでえ!？」

「我が精霊はエレメントの力を操る。温度の操作など造作もない。

さらにそれだけではないぞ？」

意地悪く笑っているような魔術

師の声。

それに反論する間もなく、次なる現象がルクスルナを襲った。

ばちい!

「あぎゃああああ!！」

精霊が、電撃を発し始めたのだ。

焼き切られるような苦痛、はじ

けとぶような衝撃。

その二つによって激しい悲鳴を

あげさせられるルクスルナ。

穢される星より

その隙をつくように、サキュバスの魔性の指が聖域をかき乱す。

サキュバスはスターブライートの反応を楽し気に確認すると、その

「ひゃあああ！？ あんっ、ああん！」

袴越し、パンツ越しに、自身の指をスターブライートの秘所に割り当てた。

今まで出したこともない声に戸惑ったのは他ならぬスターブライト自身だった。

そして。

本能がこれは出してはいけない

「えい」
「きゅっ!？」

声だと警鐘を鳴らす、抑えることができない。

ずぶりと、サキュバスの指がまだなんの侵入も許していなかった神聖なクレバスに入り込む。

「いい反応、勇者様、こういうことされるの初めてでしょ？」

素っ頓狂な声をあげるスターブライト。

「こ、こんにゃ、わけわかんないことされりゅの、初めてに決まってるよ、ああん！」

彼女の意識はわけのわからない行為に混乱していた。

「これが気持ちいいってことよ。」

ただただ与えられる刺激が、それをより一層強固なものにする。

ただサキュバスの弄ぶまま、手玉にとられて嬌声を垂れ流すスターブライト。

思考と体は混乱していた。

未知の感覚に涙が流れ、口の端

からは涎が零れ落ちる。